

【使徒書日課】使徒言行録 20章17～35節

¹⁷パウロはミレトスからエフェソに人をやって、教会の長老たちを呼び寄せた。
¹⁸長老たちが集まって来たとき、パウロはこう話した。「アジア州に来た最初の日以来、わたしがあなたがたと共にどのように過ごしてきたかは、よくご存じです。¹⁹すなわち、自分を全く取るに足りない者と思い、涙を流しながら、また、ユダヤ人の数々の陰謀によってこの身にふりかかってきた試練に遭いながらも、主にお仕えしてきました。²⁰役に立つことは一つ残らず、公衆の面前でも方々の家でも、あなたがたに伝え、また教えてきました。²¹神に対する悔い改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰とを、ユダヤ人にもギリシア人にも力強く証してきたのです。²²そして今、わたしは、“霊”に促されてエルサレムに行きます。そこでどんなことがこの身に起こるか、何も分かりません。²³ただ、投獄と苦難とがわたしを待ち受けているということだけは、聖霊がどこの町でもはっきり告げてくださっています。²⁴しかし、自分の決められた道を走りとおし、また、主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません。

²⁵そして今、あなたがたが皆もう二度とわたしの顔を見ることがないとわたしには分かっています。わたしは、あなたがたの間を巡回して御国を宣べ伝えたのです。²⁶だから、特に今日はっきり言います。だれの血についても、わたしには責任がありません。²⁷わたしは、神の御計画をすべて、ひるむことなくあなたがたに伝えたからです。²⁸どうか、あなたがた自身と群れ全体とに気を配ってください。聖霊は、神が御子の血によって御自分のものとなさった神の教会の世話をさせるために、あなたがたをこの群れの監督者に任命なさったのです。²⁹わたしが去った後に、残忍な狼どもがあなたがたのところへ入り込んで来て群れを荒らすことが、わたしには分かっています。³⁰また、あなたがた自身の中からも、邪説を唱えて弟子たちを従わせようとする者が現れます。³¹だから、わたしが三年間、あなたがた一人一人に夜も昼も涙を流して教えてきたことを思い起こして、目を覚ましていなさい。³²そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます。この言葉は、あなたがたを造り上げ、聖なる者とされたすべての人々と共に恵みを受け継がせることができるのです。³³わたしは、他人の金銀や衣服をむさぼったことはありません。³⁴ご存じのとおり、わたしはこの手で、わたし自身の生活のためにも、共にいた人々のためにも働いたのです。³⁵あなたがたもこのように働いて弱い者を助けるように、また、主イエス御自身が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身

をもって示してきました。」

【福音書日課】マタイによる福音書 10章16～25節

¹⁶「わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに羊を送り込むようなものだ。だから、蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい。¹⁷人々を警戒しなさい。あなたがたは地方法院に引き渡され、会堂で鞭打たれるからである。¹⁸また、わたしのために総督や王の前に引き出されて、彼らや異邦人に証しをすることになる。¹⁹引き渡されたときは、何をどう言おうかと心配してはならない。そのときには、言うべきことは教えられる。²⁰実は、話すのはあなたがたではなく、あなたがたの中で語ってくださる、父の霊である。²¹兄弟は兄弟を、父は子を死に追いやり、子は親に反抗して殺すだろう。²²また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。²³一つの町で迫害されたときは、他の町へ逃げて行きなさい。はっきり言っておく。あなたがたがイスラエルの町を回り終わらないうちに、人の子は来る。²⁴弟子は師にまさるものではなく、僕は主人にまさるものではない。²⁵弟子は師のように、僕は主人のようになれば、それで十分である。家の主人がベルゼブルと言われるのなら、その家族の者をもっとひどく言われることだろう。」

狼の群れに羊【こども説教のために】

「こどもの教会（教会学校）」では、今日の午後、「サマープログラム（夏期学校）」を実施します。これに向けて、7月から一つのテーマで取り組んできました。今夏のテーマは、「ザアカイ、おりてきて！」。ルカ福音書 19 章の「徴税人の頭ザアカイ」の物語です。その聖書箇所（ルカ 19:1～10）の終わりに、「人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである」という御言葉があります。主イエスは、徴税人や罪人をお招きになられる理由を問われて、見失った羊を捜し出す者の喜びをお語りになられていました（ルカ 15:1～7）。「主に養われる羊の群れ」（詩編 100:3）であるわたしたちの一人でも失われたままであってはならない、捜し出して救われなければならないと、主イエスはお考えだったので。

その主イエスが、ご自分の働きを受け継がせるために弟子たちをお遣わしになられたとき、「それは、狼の群れに羊を送り込むようなものだ」とおっしゃられました。それほどの危険があっても、主イエスは「失われたもの」を捜し出す働きが続けられるようにと、弟子たちをお遣わしになられたのです。弟子たちは、それに応えました。弟子たちも、「失われていた」のに見つけ出してもらった一人ひとりだったからです。「ただで受けたのだから、ただで与えなさい」（マタイ 10:8）と言われたとおり、弟子たちは、自分たちが与えられて受けたことを他の人に与える喜びを受け継ぐ教会を建てたのです。

「あなたがたを遣わす」

「平和の祈り」を重ねる 8 月は、毎年、キリスト教学校から送り出されて来る中高生を毎週のように新たにお迎えする季節にもなっています。キリスト教学校からは、毎年、校長や宗教主任の名前で教会宛に、「生徒たちを送るのでよろしく」という挨拶状が送られてきます。学校としては、生徒たちを教会に送り出したとき、そこで受け入れてもらえるように、嫌な思いをしないようにと、心配は尽きないのでしょう。実のところ、学校から送り出した生徒が教会に通い続けるようになることは、期待するほど多くはありません。教会が、せっかく来てくださった方の期待やニーズに応えられていないのかもしれないかもしれません。そうすると、学校としては、生徒を教会に送り出すことは、「狼の群れに羊を送り込むようなもの」という心境になられているのではないのでしょうか。

今日は、午後の「こどもの教会サマープログラム」のために、他の教会から来てくださる方があります。ご自分の教会のこともある中で駆けつけてくださるのは、うれしいことです。送り出してくださる教会は、まさか、「狼の群れに羊を送り込むようなもの」とは思われていないでしょう。わたしたちも、まさか、そのような方たちのことを、「残忍な狼どもがあなたがたのところへ入り込んで来て群れを荒らす」とは思っていないです。むしろ、お互いに普段は別々の「羊の群れ」に属している「羊」同士として、再会を喜び、旧交を温める機会ととらえているはずです。

本当は、初めておいでくださった方とも、同じような思いで互いを受け入れ合いたいのです。初めてでなくても、日曜日の礼拝に共にあずかりながら、互いに挨拶もしたことがない者同士、互いを「羊の群れ」の仲間として受け入れ合いたいのです。その人は、学校や他の教会など、別の「羊の群れ」に普段は属している方かもしれません。その人は、「羊の群れ」から迷い出してしまって、彷徨った末に、主イエスがわたしたちの教会にお連れくださった方かもしれません。

わたしたちが、互いを受け入れ合えないのは、どこかで相手のことを「狼」だと思っているからなのでしょう。自分が「狼」だという自覚ならば、「相手を喰ってやろう」と「羊」に近づくことを厭わないかもしれません。けれども、わたしたちの多くは、自分のことを「羊」だと思いながら、相手のことは「狼」であるかのように考えてしまっている。「狼」だから、「与えること」よりも「奪う」ことばかり考えている、と決めつけてしまっている。警戒してしまっているのです。

けれども、主イエスは言われるのです、「狼の群れに羊を送り込む」と。それは、「ただで受けたのだから、ただで与え」ようになるためなのでしょう。

「受けるよりは与える方が幸い」

エフェソの教会の長老たちに語ったパウロは、「狼」を「**残忍な**」存在として敵視しているところがあるようです。パウロは、三年間、教え導いたエフェソの教会の人々の今後のことが心配なのでしょう。

主イエスは、パウロほど「狼」を敵視しているわけではないのかもしれませんが。主イエスも「狼」のことを「**食欲な**」（マタイ 7:15）存在としてお考えだったところがあります。それでも、主イエスは、パウロほど「狼」を敵視していないと思います。そうでなければ、「**狼の群れに羊を送り込む**」というようなことをおっしゃられることはなかったのではないのでしょうか。

「熊」は群れをつくりませんが、「狼」は、群れで生きる動物です。リーダーの雄に統率された十数頭の群れをつくります。群れの中で生まれ育ち、成長したときにその群れを離れますが、どこか他の群れに受け入れてもらうことができれば、生き残ることは難しいのです。

主イエスが、そのような「狼」の生態をご存じだったのかは、わかりません。けれども、弟子たちが行った先で引き渡されるという人々のことを「狼」に譬えたとき、主イエスは、「狼」も群れをなさなければ生きていけないものであるとお考えだったのでしょう。だから、「羊」は、「狼の群れ」に送り込まれ、「狼」どものただ中に置かれる、とおっしゃったのです。

人は、結局、「羊」であろうと「狼」であろうと、群れて生きるしかない存在です。どれほど個人主義を唱えようと、他の人との関りを完全に絶って生きることのできる者は、ほとんどいません。他の人の営みに依存し、与えられ、それを受け取って、どうにか生きているのです。社会制度が整えられたので、それを当たり前のようにしていますが、だからと言って、自分一人で生きていける、ということにはならないのです。

パウロは、主イエスが「**受けるより与える方が幸いである**」とお教えになられたことを思い出すように勧めました。わたしたちは皆、さんざん他の人から「受けてきた」者なのです。それを「狼」のように食欲に貪ってきました。「羊」の命を、いただいてきました。主イエスは、生涯をかけて、そのことを弟子たちに分らせてくださったのです。ご自身を犠牲の「羊」としてお示しになられて、「わたしの命を受けなさい」と、「狼」のような者たちにお与えくださったのです。神の羊の群れから遠く離れ、「狼」のように生きることしか知らなかった者を、見つけ出し、連れ戻し、「羊」として群れに生きるようにしてくださったのです。

主イエスは、わたしたちをお遣わしになられます。「羊」となった元「狼」を、「**狼の群れ**」の中に送り出してくださっているのです。「羊」の群れに生きる幸いを知った者として。自らを与え合う喜びを知る者として。